

小和田毅夫と相馬御風

金子 善八郎

一

今回の代替わりで、改めて小和田毅夫と御風のことが話題になった。周知のように、小和田毅夫は、皇后雅子さんの祖父に当たり、かつて御風の組織した短歌の会「木蔭会」の会員であり、御風と親しい関係にあった。

御風が大正五年、糸魚川へ帰住して、ただちに組織したのが「木蔭会」である。この時、地元糸魚川中学校の国語の教師であった小和田毅夫も会員として歌を寄せている。歌を寄せた人は、地元では、松野泰助、川原広一、島道重平、中村慶三郎など、地区外の人では、岡本文弥、中学校の教師中野二三郎など五十四人。

二

小和田毅夫は、越後村上藩の家臣の子孫で明治三十一年（一八九八）生まれ。広島高等師範学校卒、大正十五年（一九二六）から昭和四年（一九二九）まで新潟県立糸魚川中学校教諭。

その後、石川県立七尾中学校教頭、新潟県立新発田中学校教頭・校長などを歴任して、戦後は旧制高田中学・新制高田高校の校長になった。

退職後は、高田市の教育委員長を三期務める。

平成五年（一九九三）十月十九日逝去。

去。

小和田毅夫の二男、小和田恆（ひさし）さんは、昭和七年（一九三二）生まれ、東大を卒業して外交官として活躍。

皇后になった雅子さんは、小和田恆さんの長女。昭和三十八年（一九六三）生まれ。昭和六十一年（一九八六）ハーバード大学経済学部卒。同年、東京大学法学部へ学士入学、翌、昭和六十二年（一九八七）、同大学中退、同年、外務省入省、昭和六十三年（一九八八）オックスフォード大学へ外務省の研修生として入学、平成五年（一九九三）外務省退職。同年六月、皇太子徳仁親王と結婚し皇太子妃となる。

三

小和田毅夫と御風の交際の様子がよく分かるのは、手紙・交信の記録。御風宛の小和田の手紙で、糸魚川歴史民俗資料館所蔵のものは、『相馬御風宛書簡集Ⅲ―芸術家・芸能人・出版者・教育者・宗教家の書簡―』（平成二十一年三月二十五日）に収載されている。昭和六年一月一日の葉書は、石川県七尾町所口石川県立七尾中学校からの年賀状。続く昭和七年一月一日の葉書も年賀状だが、こちらは新潟県立新発田中学校から発信したもの。次の昭和七年七月十三日付けの巻紙封書は、テル夫人逝去の弔文。

突然御令正様御逝去の御通知ニ接し寔々驚愕仕候御病氣なりしとハ一向ニ

存ぜずして遂ニ御見舞も申上げず申訳も無之候御大切な御奥様を失はれし先生の御落胆慈愛深き御母堂様に別れられし御子様方の御悲歎之程推察仕り衷心哀悼の情ニ堪へず候。

最後の昭和十二年一月一日の葉書は年賀状。発信、新潟県立六日町中学校小和田毅夫。

次は、『木蔭歌集』に載っている木蔭編集者宛小和田の手紙。

木かげだより 小和田毅夫

前略、木蔭會總會には是非参りたいと思つてゐたのですが、廿五六七の三日間、九師團機動演習に参加附添として本日出發、遺憾ながら参りかねます、皆様によろしく。歌も出来てゐますが目下訂正中、二三日中に送ります。長い間の怠慢で恐縮に存じてゐます。先生にも未だに失禮してゐます。これも氣がゝりの一つ。御自愛を祈る。（十月廿五日）（木蔭第二巻第五号・昭和四年十二月一日）

木かげだより 小和田毅夫

先生はじめ皆々様には益々御健勝に渡らせられお喜び申上げます。私も幸に元氣で暮してゐますから御安心下さいませ。

御地出立以來、どなたに對してもあ

まりの御無音にて衷心慚愧の至りに堪へませぬ。便りもせねばならぬ、歌も送りたいと毎日考へない事はないのですが、性來の筆不精に加ふるに才拙くして歌も出來ずそれに御催促を受けないことをよいことにしてつい心ならずも失禮のみ重ねてゐました次第、何卒御宥恕下されたく願ひ上げます。漸く別紙歌稿同封お送り申しましたから可然御取捨下さいませ。

木蔭會も貴兄はじめ各位の御盡力で近來著しく發展の御様子喜びに堪へませぬ。歌集の内容益々充實して行きます事も心からうれしく思ひますと共に編輯に當られる各位の御骨折に對しても感謝の情を禁じ得ませぬ。

先達の總會には是非出席致し度いと思つて居ましたが、折悪しく生徒演習参加の都合上止むを得ず不参、残念に存じます。

當町の歌壇の事はよく知りませぬが學校内には數名の歌人があります。皆題詠をやり古今集張りであり感心しませぬから仲間にも入りませぬ。それよりも今少し暇にもなり、校務にも馴れたら同好の士を集めて歌會でも發起しやうかと考へてゐます。さうなればまた色々御厄介になる事と思ひますがよろしく願ひます。但し一つの事になりますか今の所はつきり申しかねます。

時下御自愛を祈り上げます、皆様によろしくお傳へ下さい。